作品名		作品番号	1/
校名			
氏名			

在ったもの 在るもの 在るであろうもの



校名 京都橋大学
氏名 小西　孝拓

01 · Concept - 無題

現代の死は、奇妙な矛盾の渦の中にある。映像や物語の中では過剰に消費され、刺激として反復される一方で、自分自身や身近な人の死について語ることは避けられ、沈黙の側へ押し込まれていく。効率と合理性を最優先に走り続ける都市の時間は、死という「不条理な断絶」に立ち止まる余白を奪い、私たちはそれを「遠い出来事」として処理してしまう。だが、死は本当に、生の対極にある単なる「無」なのだろうか。

ショーペンハウアーは、死を「全くなじみのない新たな状態への移行ではなく、むしろ、われわれにもともと固有の状態への復帰」と捉えた。個体としての意識が消えるとしても、その根底には、形を変えながら循環し続けるものがある。そこには、「私は在ったもの、在るもの、在るであろうもののすべてである」という感覚――個の終わりが、世界のすべてと連なりと無関係ではないという直観が宿る。

本計画は、この直観を観念として語るのではなく、自体感覚として引き受けるための「場」をつくろうとする試みである。

ここで目指すのは、死を劇的に演出することでも、逆に見えない場所へ追いやることでもない。ボルノグライフィーとして消費される死と、抑圧される死、その両極のあいだで揺れる私たちにとって、死を、扱える距離、に置き直すための足場をつくることである。死を見つめることは、暗く沈むためではなく、いま生きている時間の輪郭を取り戻し、過去の蓄積と未来の連なりの中に自分を置き直すための契機になりうる。

死は個体であり恐怖である。無であり有である。喪失であり残酷である。完成であり崩壊である。循環であり停滞である。契機であり結果である。――この多義性を、ひとつに結論づけるのではなく、地形と時間の層の中で静かに受け止め、なお生きていくための場所をこの旧金勝川の底に重ねる。

02 · problem - 多義性と流動性のあいだで、建築にできることは？

日本はこれから、本格的な多死社会を迎えようとしている。

医療技術の発展によって寿命は伸び、心臓や臓器を人工物で補いながら生きることも現実になりつつある一方で、「いつまで延命するのか」「どこまで治療を続けるのか」といった問題は、個人や家族だけでなく、社会全体の課題として前景化しつつある。死はこれまで「個人的な出来事」として扱われてきたが、その医療費・ケア・ケアする人の負担は、すでに公共的な問題に変わりつつある。

同時に、葬儀そのものも 小化・短期化している。かつては数日にわたって行われていた通夜や葬儀が、一日葬や直葬（火葬のみ）へと置き換えられ、儀式の時間と場は削られていく。

そこには「負担を減らしたい」「簡素でよい」という経済的合理性の理由もあるが、その過程で故人ときちんと向き合うための時間や、死と向き合い直すためのプロセスが失われつつある。

情報社会ではさらに、ニュース映像やフィクションの中で、暴力的な死や悲劇的な死が「消費されるイメージ」として大量に流通し、一方で自分自身や身近な人の死について語ることは、どこかタブー視されていく。死はボルノグライフィックに誇張されるが、あるいは徹底的に抑圧されるが、その両極のあいだで揺れ動いているように見える。

しかし、死は誰にとっても避けられない出来事であり、自分の宿命であり、普遍的な経験でもある。古代以来、多くの哲学者や宗教者が「死とは何か」を問い続けてきたのは、その問いが生きたそのものと切り離せないからだ。


概念図

03 · Site - 「向き合う葬斎場」のための場所

滋賀県栗東市南部は、信楽山地の北縁にあたる金勝山・阿星山・竜王山が連なり、その山地から古琵琶湖層の丘陵がゆるやかに北へ傾き、先に扇状地の平野がひらける。

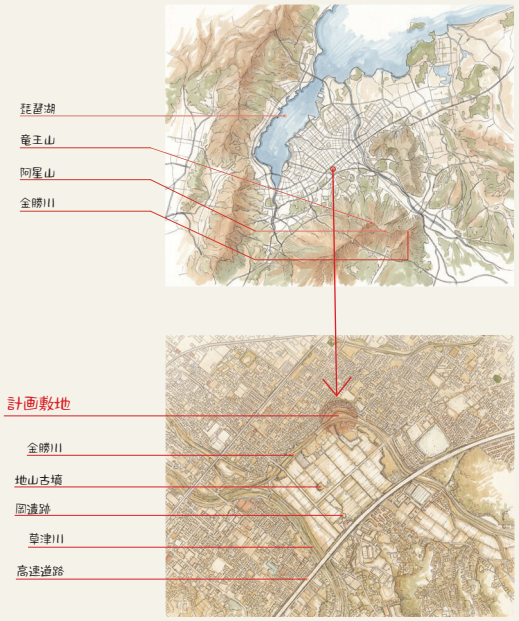
金勝川と草津川は、丘陵の縁を削りながら平野部へと流れ出し、合流部の周辺には、田園と住宅地が入り混じる景観が広がっている。

栗東市と隣接する草津市は、滋賀県のなかでも高齢化率が低く、若い世代が多く暮らす地域である。大学や産業の集積により人口が増加を続け、平均年齢も全国平均より低い。

多死社会が切迫した問題となる都市部とは異なり、この地域には時間をかけて死と向き合うための余白がある。

敷地は、金勝川の旧河川敷に位置する。堤防とそれを覆う樹木や草が連なり、構に住宅街が広がる。日常と地続きでありながら、緩によってわずかに視線が遮られ場所だ。

ここならば、生活のすぐそばに死を置きながらも、日常を傷つけず、そっと距離を取ることができる。



04 · Program - 「向き合う葬斎場」のための順番

この計画のプログラムは、機能の並置ではなく、死を「消費して終える」時間から、死を見つめて「生を耕し直す」時間へと変換するための順番として組み立てられている。

儀式の里で、死者は一基の卵を経て、山へ、樹木へと接続され、骨を埋め、木を植え、やがてその木々が雨を抱え、土を押さえ、風景の一部として土地を保護する側へまわっていく。

ここで扱われるのは処理ではなく、過去の蓄積と未来の連なりを結び直すための装置としての時間である。

迎え／到着・受付は、社会の速度から自体を切り離す最初の場である。

現実の手続きでありながら、ここで呼吸と声のスピードが変わり、「儀式の時間」へ足が掛かる。

通夜／告別は、別れを〝段取り〟にしないための核である。

人が集まり、沈黙と会話が交互に起こり、寝ずを笑いも同じ部屋に混ざる。

故人の不在が、関係の中でゆっくり輪郭を持ちはじめる。

火葬は、数量をさばく装置ではなく、取り返しのつかない断絶を引き受ける場である。

一基であることは不足ではなく、急がないという態度を明確にし、時間の重さを取り戻す。

待合は、ただ待つ場所ではない。言葉が空回りする時間、手持ち無沙汰の時間、どうでもいいことを数えてしまう時間――そうした「揺れる時間」を受け止めることで、悲嘆が無理に整えられず、自然に次の行為へ移行できる。

収骨は、関係が自体を通って確定する瞬間である。軽さと重さが同時に来る。

ここで引かれるのは「そう戻らない時間」と「それでも続いていく時間」の、ごく細い境界線だ。

追悼は、儀式を終わらせる場所ではなく、日常へ戻る速度を調整する場所である。

すぐ歩き出せる人と、まだ戻れない人が同じ空間にいてよい。

外の気配（鉄塔、高速道路、散歩の人、山並み）が混ざり込み、非日常はゆっくり日常に縫い戻される。

植樹は、儀式は施設的で閉じない。山へ、樹木へと接続されること。

死は個人の終わりであると同時に、土地と流域の時間へ編み込まれる。

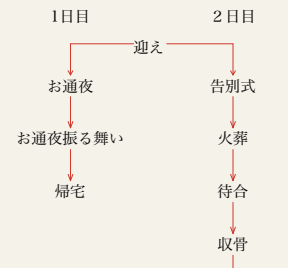
植えられた木はやがて雨を抱え、土を押さえ、風景として残り、土地を守る側へまわっていく。

ここで初めて、死は「終わり」だけでなく、未来への責任として現れる。


敷地周辺写真













地域	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
草津市	935人	962人	1045人	1,155人	1,214人
栗東市	455人	475人	543人	532人	489人
日本	1,372,755人	1,439,856人	1,569,050人	1,576,016人	1,605,378人
地域	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
草津市	135,839人	137,266人	138,139人	139,550人	140,286人
栗東市	70,362人	70,345人	70,568人	70,447人	70,412人
日本	123,398,962人	122,780,487人	122,030,523人	121,193,394人	120,295,592人

草津市、栗東市の死亡者数（上）と人口（下）

05 · Design code - 「停まる」「にじんでいく」「架ける」

―停まる―

遠くまで走った記録を振り返ってみるとみえてくるモノがあるような気がする。

ひとは、死という履歴の停止線の手前で、ときどき足を止めて、ここまで走ってきた跡を振り返る。

葬儀は、これ以上先には進めなくなった誰かの代わりに、その人の記録と、自分の記録を重ねて見直す時間なのかもしれない。

川の流れがいちど止められて旧川になったように、この場所で人生の流れもいちど「停まり」見えていなかったものがゆっくり立ち上がってくる。

―にじんでいく―

私がいてあなたがいる。あなたがいて私がいる。どちらが先かどちらが後かでもあるがそうでもないような気がする。

私がいてあなたがいる。あなたがいて私がいる。

どちらが先か分からないように、関係の中で形づくられた私たちは、誰かが死んだあとも完全には切り離されない。

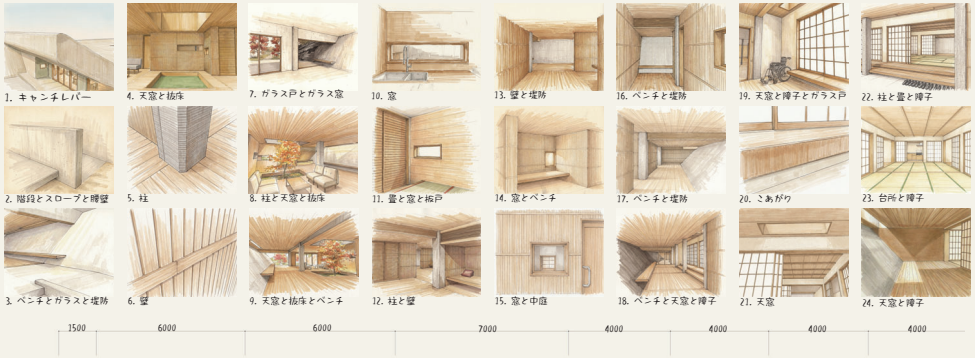
死んだ「あなた」が私の言葉や仕草にゆっくりと染み込んでいくように、この建築もまた、死の気配をかすかに残しながら、静かな暮らしの景色へと馴染んでいく。

―架ける―

わたしは、なにを残していけるのかな。誰かの死に向き合うとき、同時に「これから生きていく自分は何をしていきたいのか、そして何を渡していくのか」という問いが立ち上がる。

この建築は、その問いを抱えたまま、人をもう一度それぞれの日常へと送り出していく。







事務・儀式棟　1/150

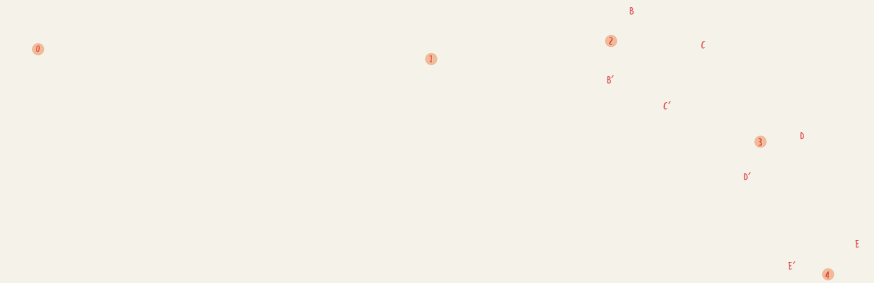
0. 駐車場

1. 事務・儀式棟　：174.4 ㎡

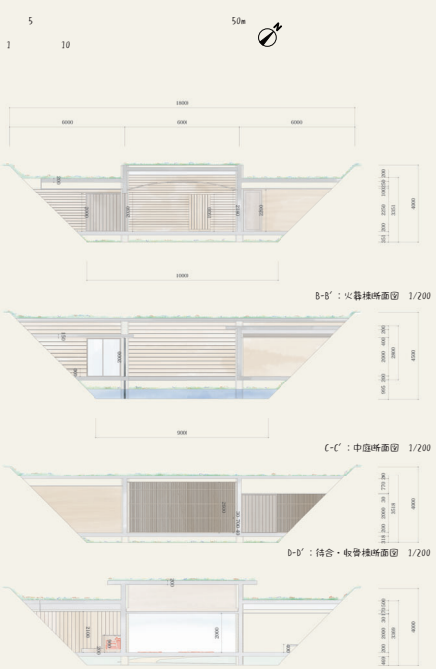
2. 火葬棟　：150 ㎡

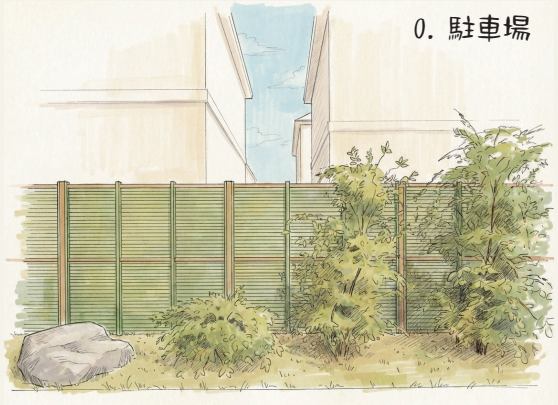
3. 待合・収骨棟　：157.3 ㎡

4. 追悼棟　：187.8 ㎡



配置図・平面図　1/1000

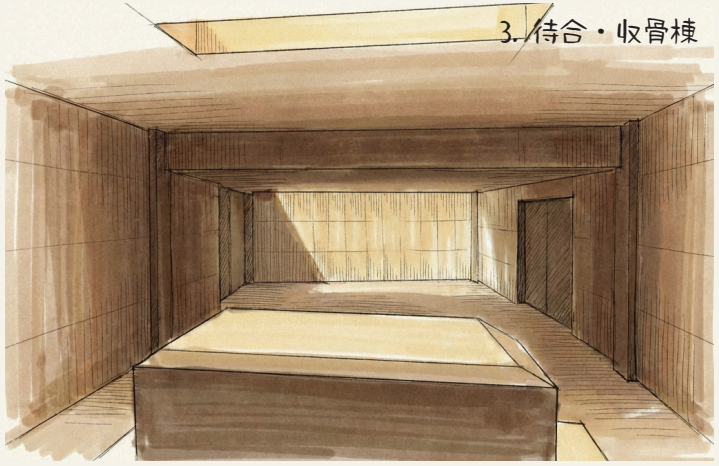




御簾垣を「儀式」と「日常」を仲立ちする装置として用いる。
竹はこの土地にあったものであり、形を変えて在るものになる。
垣の竹と竹の隙間から気配や光だけがにじみ出し、内と外の時間を静かにつなぐ。死を遠ざけず、晒しもせず、「そっと隣に在るもの」として受け入れるための中間的な膜である。

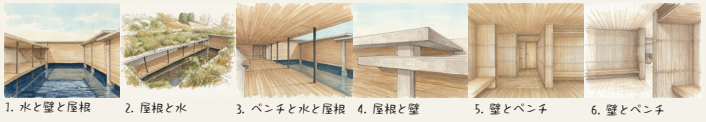
作品名	在ったもの 在るもの 在るであろうもの	作品番号	4/5
校名	京都橘大学		
氏名	小西　孝拓		

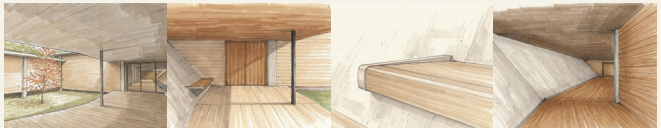


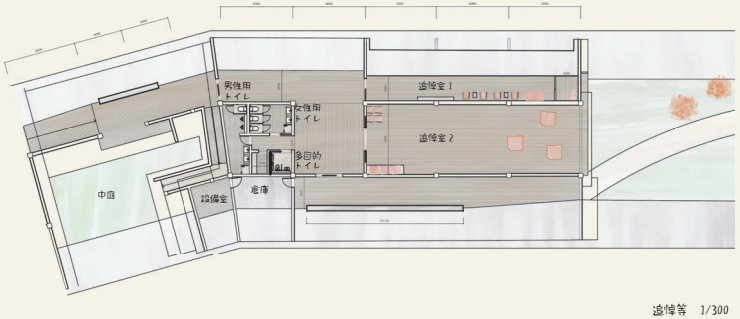




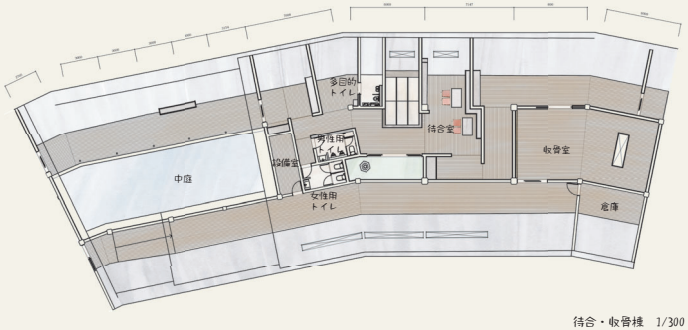

1. 緑と堤防と壁
2. 壁と緑と屋根
3. 壁と屋根と堤防
4. 堤防と屋根
5. ガラス戸とベンチ
6. 壁と戸
7. 柱と壁
8. 堤防とガラス戸
9. 堤防と壁
10. こあがり
11. 天窓と抜床
12. ベンチと壁
13. 天井と壁
14. 天井と柱と壁
15. ベンチと壁と床


1. 水と壁と屋根
2. 屋根と水
3. ベンチと水と屋根
4. 屋根と壁
5. 壁とベンチ
6. 壁とベンチ
7. こあがり
8. 天窓とベンチ
9. ガラス戸と壁
10. 杉皮と畳
11. ベンチと天井
12. 天窓と畳
13. ベンチとテーブル
14. 壁と堤防
15. 天窓とベンチ
16. 壁と柱と堤防
17. 壁と天井と柱
18. 天窓と台

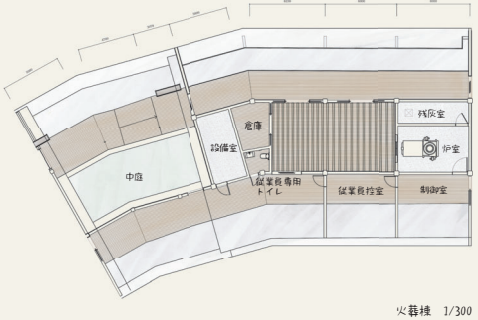

1. ベンチとガラス窓
2. ベンチと緑と堤防
3. ベンチ
4. 壁と天井と柱
5. 壁と天井と柱
6. 床と梁
7. 壁と柱と天井
8. 柱と天井と扉
9. 柱と天井と扉
10. 扉と天井
11. 格子
12. 天窓



追悼等　1/300



待合・収骨棟　1/300



火葬棟　1/300

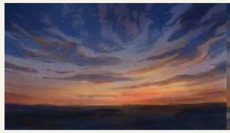
作品名	在ったもの 在るもの 在るであろうもの	作品番号	5/5
校名	京都橘大学		
氏名	小西　孝拓		







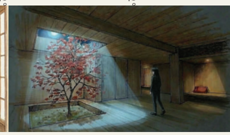


うつろいゆく

滋賀県栗東市目川。
かつて天井川だった旧金勝川の底には、
もう水が流れていない。
堤防の斜面まで、草に覆われている。
その静かな谷間に、小さな葬祭場が建った。
十一月の終わり。
急に寒くなった朝だった。
ひいおばあちゃんの葬式がある。
わたしは白い息を吐きながら、
駐車場からゆっくりと歩いていった。
歩いていくと、はいきょのような建物が現れた。
灰色のかたまり。少し怖かった。
さらに近づくと、両側の壁が少しずつ高くなっていく。
空の幅が、細くなっていく。
足音だけが、やけに大きく響く。
さっきまで白い息が、だんだん重くなっていった。
お母さんの手を握りながら建物の中に入った。
奥へ進むと、上がり座敷があった。家と同じだ。
黒い靴がいくつも並んでいる。
その横で、わたしは自分の小さな靴を、
いつもよりまっすぐにそろえた。
靴をぬいで中に入ると、畳の部屋の奥に、
白い布がかけられた細長い箱があった。
そのまわりで大人達が小さな声で話している。
ときどき、すすり泣く音だけが、はっきり聞こえた。
わたしは、その箱をじっと見た。
白い布は、角のところだけ少し影が濃くて、
そこが妙に固く見えた。
花の匂いがして、線香の煙が、
まっすぐ上にのぼろうとして天井のあたりでゆらいだ。
誰かの数珠が、かすかに擦れる音がした。
ふすまの向こうから、トントンと包丁の音が聞こえてきた。
気になって、そっとふすまを開ける。
何人もの大人が、大きな鍋をかき回したり、
皿を並べたりしている。
だしとしょうゆの匂い。
さっきの線香の匂いと混ざって、部屋に広がっていく。
鍋のふちから立つ湯気の向こうで、
誰かの手が忙しく動いているのが見えた。
その手つきが、家の台所と同じ速さで、少しだけ安心した。
「これ、お母さんが作ったの？」
「おばあちゃんが作ったんだよ」
誰かが笑って、そう教えてくれた。
日が暮れていき、外が暗くなってきた。
部屋も少しずつ暗くなっていく。
白い布のかかった箱と、そのまわりの顔だけ、
ぽうっと浮かんで見えた。
障子の向こうの庭は、もう色がなくなって、
ただの影になっていった。
大人たちの話し声は、だんだんゆっくりになっていく。
笑い声。涙の音。同じ部屋の中で、まざっている。
畳に座ったまま、わたしはだんだん眠くなってきた。
でも、白い箱から目が離せなかった。
もし目を閉じたら、
その箱がどこかへ動いてしまう気がした。
やがて、「そろそろ帰ろか」という声が、
部屋のどこかで、そっとひらかれた。
お母さんに手をひかれて、部屋を出る。
黒い靴がたくさん並んでいる。
その横で、自分の小さな靴を見つけて、
いつもよりゆっくり、ちゃんと足を入れた。
靴の先が畳に触れた感触が、
なぜかいつもよりはっきり残った。
冷たい空気が、いっぺんに頬に当たる。
さっきまでいた部屋の灯りが、背中の方から、
そっとこちらを照らしている。
わたしは振り返らずに、一歩外へ出た。
白い息を吐きながら歩いていると、
横を歩くおじいちゃんに、思い切って聞いてみた。
「ひいおばあちゃん、どこに行ったん？」
おじいちゃんは少し黙ってから、「さあなあ」と言った。
それから、ゆっくり続けた。
「でもな、ひいおばあちゃんは、もう寒いとか痛いとか、
しんどいなあ、とかいうのは、
なんも感じんでええとこにおるんやと思うで」
「今『寒いな』『さみしいな』って胸がキュッとなるのは、
ここにおるわしらのほうや。せやけどな、
そうやって何かを感じとるあいだは、
生きとるってことやと、おじいちゃんは思っとるよ」
おじいちゃんの言葉が、胸の中で小さく響いた。
でも、その意味は、まだうまくつかめなかった。
おじいちゃんの手は大きくて、歩きながらポケットの中で、
鍵か何かを握っているみたいに見えた。
その背中が、夜の冷たさよりも、
もっと遠いものに向かって立っている気がした。
次の日、ひいおばあちゃんの体は、
同じ場所で火葬されたらしい。
わたしは、その場所に行かなかった。学校があったのか。
家に残っていなければならなかったのか。
火葬場のことは今でもよく思い出せない。
でも、あの夜の帰り道だけは覚えている。
冷たい風。遠くに見える灯り。
暗い空に浮かぶ白い息。
その光景だけは、時間がたっても、消えずに残り続けた。
遠くの灯りは、まるで川の底に落ちた星みたいで、
近づこうとしても近づけないまま、ただ並んでいた。
家に着いたとき、玄関の明かりがいつもよりまぶしくて、
わたしは目を細めた。
それでも胸の中の寒さは、しばらく取れなかった。
ずっとあとになって、
わたしはもう一度、この葬祭場に来ることになる。
今度は、おばあちゃんを見送るために。



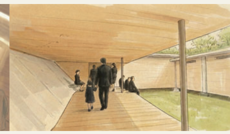






電話が鳴ったのは、製図台にかじりついていた昨日の昼下がりだった。
「おばあちゃん、もう危ないらしいよ」弟の声を聞いた瞬間、
胸のどこかが、静かに冷えていった。
そのあとの時間を、うまく思い出せない。
図面をめくった。本を開いた。線を引いた。
でも、何も頭に入ってこなかった。
そして今夜。わたしは葬儀場の駐車場に立っている。
濡れたアスファルト。にじんだ家族の影。
薄暗くひかる建物の入口だけが、じっとこちらを待っている。
「死」は、どこか遠くの話だと思っていた。
本や映画の中に、閉じ込めておけるものだと思っていた。
でも、今夜は違う。
あの入口の向こうで、「考えてきた死」と「目の前の死」が、重なろうとしている。
入口のドアに近づくと、細長いベンチが見えた。
外から建物の中へとつながっている。
その上に、天窓からの光が落ちている。
建物に入る。
月のあかり。虫の鳴き声。
それらが、うっすらと建物の中に流れ込んでいる。
家族は受付を済ませて、先へ歩いていく。
わたしだけ、少し足が遅くなる。
ここに座ればいいのか。まっすぐ進めばいいのか。頭より先に、体が迷っている。
「死ぬってどういうことなんだろう」
何度も考えてきた言葉が、天窓の光の下で、黙り込む。
ここで停まりなさい、と誰かに肩をつかまれたような気がした。
天窓の下まで歩いて、ベンチに腰を下ろす。
木の座面に、昼の名残のようなぬくもりが残っている。
それが、じわっと体に染みてくる。
顔を上げると、月のあかりが部屋の奥まで薄く入り込んでいた。
「死は何ものでもない」「恐怖をいやしてくれるのは、現実の危険だけだ」
頭の中で育ててきた言葉たちが、いっぺんに色あせていく。
ここにあるのは、ただ、短い「停まり」の時間だけ。
膝の上で、手をぎゅっと握る。
指先に、自分の鼓動がかすかに触れた。
「まだ、生きてる」心の中でつぶやいて、もう一度天窓を見上げる。
それから立ち上がり、奥のほうから聞こえてくる家族の気配へと歩き出した。
ベンチから立ち上がって、家族のあとを追いかける。
廊下は、少しずつ角度を変えながら続いていた。
途中に、いくつか椅子が置かれている。
そこを通り過ぎるたびに、足が止まりたがる。
でも、今座ったら、もう儀式室までたどり着けない気がした。
視線を奥へ、奥へとやる。突き当たりに、小さな段差が現れた。
靴を脱ぐ場所だ。
靴を脱いで足をのせると、ひんやりとした感触が、
さっきまで握っていた手のぬくもりを、すっと遠くへ押しやった。
この先で、どんな顔をすればいいんだろう。
「おつかれさま」「大変でしたね」
頭に浮かぶ言葉は、どれも少しずつ場違いに見える。
襖にそっと手をかける。
忙しなく準備をする音。誰かの泣き声。
それらが混ざりあいながら、薄い紙一枚を挟んで、こちら側までにじんできていた。
部屋から音がしなくなった。
胸のあたりがざわついて、焦って襖を横に引く。
畳の匂いと線香の煙が、ふわっと顔にまとわりついてきた。
部屋の奥に、白い布に包まれたおばあちゃんが横たわっている。
「遠いところ、よう来てくれはったなあ」誰かが小さな声で言う。
少しあとに、「いえいえ、こちらこそ」と返ってくる。
同じ形の言葉が、同じ場所でくるくる回っている。
わたしも「お疲れさまです」と、言おうとした。
けれど、喉のあたりでひっかかって、外に出てこない。
優しい言葉なのに、どこかで少しだけ、届きそこねている気がする。
部屋の隅に空いた席を見つけて、そっと腰を下ろす。
視線の先では、白い布の端が、わずかに光を返していた。
何か言わなきゃいけない気がする。
でも、何を言っても足りない気もする。
ふいに、正面のほうで気配が動いた。
わたしは手を膝の上で組んだまま、息だけを静かに整えた。
襖がもう一度開いて、黒い衣のすそが、ゆっくりと部屋の中に流れ込んでくる。
誰かが小さく立ち上がる。
それにつられるように、次々と背中が伸びていく。
さっきまでばらばらだった空気が、「式」というひとつの形に組み替えられていく。
お経の声が、部屋の隅々まで広がっていく。
「亡くなられた〇〇さんは——」
よく聞く言い回しが、今度はおばあちゃんの名前とくっついて、目の前に置かれた。
ありがたいはずの言葉なのに、わたしの胸の中では、薄い膜を一枚はさんで響いてくる。
それでも、何もないよりはずっとましだ。
いまここで、おばあちゃんの死を受け止めようとしている人たちが、こんなにいる。
声が、そっとそれを教えてくれる。
お経の声が少しずつしぼんでいき、部屋の空気がふっとゆるんだ。
母が座布団を立った。次はわたしの焼香の番だ。
低く抑えられた天井が、わたしとおばあちゃんを、そっとつなげてくれている気がした。
近くで見るおばあちゃんの顔は、いつもより少しだけ遠くにいるみたいだった。
それでも、ここまで来て社交辞令みたいな言葉でごまかすのは嫌だ。
心の中で、「ありがとう」と言う。
それから「ごめんね」とも言う。
台所で盗み食いしたこと。わたしの話を、何度も同じところで聞き間違えたこと。
全部まとめて。
口から出たのは、小さな声だった。
「おばあちゃんの孫で、ほんとうに良かった」
でも、その奥にくっつけた言葉たちが、線香の煙にまぎれて、おばあちゃんのほうへ、
ゆっくり登っていく気がした。
式がひと区切りつくと、部屋の明るさが少しだけ上がった気がした。
隣の部屋から、湯気とだしの匂いがゆっくり流れてくる。
「遠いところ、ありがとうございます」「お疲れさまです」
さっきまでお焼香の列に並んでいた人たちが、
今度はテーブルをはさんで同じ形の言葉をやりとりしている。
買ってきた折詰の横に、
母と親戚のおばちゃんたちが作った煮物やお味噌汁が並べられていく。
湯気の立ちのぼる鍋の前だけ、社交辞令じゃない温度が残っているように見えた。
「手、空いてる？」
母に呼ばれて、わたしは紙コップを並べたり、お椀を配ったりしはじめた。
ひと息ついたころ、袖口がちょんちょんと引っ張られた。
振り向くと、お姉ちゃんの子どもが、味噌汁のお椀を両手で抱えたまま見上げてくる。
「この味噌汁、ママが作ったん？」一瞬だけ迷ってから、答える。
「ううん、それは、わたしのお母さんが作ったんだよ」
子どもは「ふーん」とあっさり納得して、お椀に口をつけた。
その飲み方が、昔、おばあちゃんの味噌汁をすするお姉ちゃんにそっくりで、
思わず笑いそうになる。
この味が、おばあちゃんから母へ、母からお姉ちゃんへと渡ってきたものだなんて、
子どもは知らない。「今」の顔をして、湯気ごと、おいしそうに飲み込んでいった。
部屋のあちこちで、違う時間が動いていた。
あちらでは、おじさんたちが缶ビール片手に昔話で笑っている。
こちらでは、「これからどうするん？」と、少し先の話をしている。
隅のほうでは、泣いている人の肩を、誰かがそっとさすっていた。
台所のほうからは、食器の触れ合う音と、
「そっちはもう下げてええよ」という声が聞こえる。
ひとつの部屋の中で、過去と今と未来が、静かに混じり合っている。
わたしは配り残したお椀がないか確かめながら、ぼんやり思う。
この騒がしさは、おばあちゃんが在ったことから続いているんだろうな、と。
通夜の夜は、まだ終わらない。
でも、さっきより少しだけ、「ここから先も生きていく人たちの時間」が、
形を持ち始めているように見えた。












朝の空は、水色と灰色のあいだのような色をしていた。
駐車場から建物へ向かう。
夜には少し怖く見えた建物が、朝の光の中では、違って見える。
見えていなかった輪郭が、立ち上がってくる。
昨夜ここで見ていた建物よりも、優しい表情をしていた。
自動ドアの前で、わたしの足が、家族より半歩遅れる。
「昨日の夜まで、おばあちゃんはここにいなかった」当たり前のその事実が、
頭の中で浮かんでは消えていく。
子どもの頃、ひいおばあちゃんが亡くなったとき、世界の色が一瞬薄くなった気がした。
今回は、その薄さが、世界の外側ではなく、自分の内側に、穴として残っている。
昨日、天窓の下のベンチで、「死とは何か」をぐるぐる考えていた。
その問いは、夜が明けてもまだ、胸の底で小さな火のように残っている。
その火を抱えたまま、わたしはもう一度、通夜を行っていた部屋の襖の前へと歩いていく。
今度は、「考えてきた死」と「送り出さなければならない死」が、同じ場所で重なる。
襖を開けると、昨夜と同じ部屋が、少しだけ違う顔をしていた。
白い布に包まれた棺のまわりに、昨夜よりもたくさんの花が並んでいる。
色とりどりの花びらと、線香の煙が、同じ場所で静かに混ざっている。
遺影の中のおばあちゃんは、少しだけ若い。
小さな頃のおばあちゃんとの思い出が、溢れてくる。
席につくと、「本日はお忙しいところ……」という叔父の声が聞こえた。
定型の言葉。よく聞く挨拶。
けれど、そのひとつひとつが、今日は全部、おばあちゃんの名前に結びついている。
前のほうで、おじいちゃんが小さくうなずいているのが見えた。
その横で、母がハンカチを握りしめている。
親戚たちの顔にも、それぞれ違う時間が刻まれている。
一緒に暮らした時間。遠くからたまに会いに来た時間。
おばあちゃんに叱られた時間。笑い合った時間。
でも今は、目の前のひとりの人の終わりと、その人から続いている、たくさんの人の時間になっている。
わたしの中のおばあちゃん。ここにいる人たちの中のおばあちゃん。
その両方が、この部屋の空気の中で、そっと重なっている。
告別式が終わると、静かだった部屋に、椅子のこすれる音がいっせいにひろがった。
黒い服の列が、波のように立ち上がる。棺が運び出されるとき、手が勝手に伸びた。
さっきまでここにあった「時間」が、そっと動き出していく。目の前の人についていく。
廊下に出ると、外からの光が昨夜よりもまぶしかった。
建物の中と外をつなぐように、長いスロープが、火葬棟へ向かって伸びている。
歩きながら、視線を少し横にずらすと、細いが力強い木が見えた。
このあと、おばあちゃんの体は、火になって、煙になって、
わたしたちの見えないところへ溶けていく。
どこかの空気や水や土と、少しずつ混ざり合っていくのかもしれない。
「もう、二度と会えない」という重さと、
「それでも、どこかで形を変えて、残り続けるのかもしれない」という感覚が、
同じ歩幅で、胸の中をいっしょに歩いている。
昨日から胸の底でくすぶっている小さな火を抱えたまま、
わたしは火葬棟の入口へ歩いていった。
火葬棟の中に足を踏み入れると、空気の密度がすこしだけ変わった。
天井から落ちる光が、壁を沿って床一面に広がっている。
壁に手をすべらせる。角の取れた木が、指先にやわらかく当たった。
すぐとなりでは、杉の木目がうっすら残ったコンクリートの柱が、ひんやりと静かに立っている。
ざらつきと滑らかさが、指先の中で入れ替わりながら続いていく。
前の人についていくと、いつの間にか別の部屋にいた。
顔を上げると、アーチを描いた天井が、波のように連なっていた。
同じ形が、奥へ奥へと反復していく。
でも、棺を迎える炉の扉だけが、中心から少しずれている。
何故か、そのゆがみが綺麗に見えた。そう思った瞬間、胸の中の不安が少し薄れた。
床を流れていく光の線は、すこしずつ角度を変えながら、
さっきよりも長く、さっきよりも薄く伸びていく。
おばあちゃんの時間は、もう残っていないはずなのに、
天井と壁と床が蓄えてきた長い時間は、何事もなかったような顔で、ただ静かに続いている。
わたしは、その光の縞を踏まないように、一筋ずつまたぎながら歩いていった。
まるで、消えていく時間と、まだ続いていく時間のあいだを、慎重に渡っているみたいだった。
係の人が話し始めた。言葉はちゃんと聞こえているのに、目の前がぼやけていく。
炉の扉が、静かに閉まりはじめる。
少しずつ掠れていく金属の音が、ゆっくりと「終わり」を告げていた。
わたしだけ、ほんの少し、その場に残った。
扉の向こうにいるおばあちゃんに、心の中で別れを告げてから、歩き出した。
次の部屋へ向かう渡り廊下の縁で、お父さんが一人で空を眺めていた。
入り口付近には、おばさんとお姉ちゃんが、小さな声で何かを話している。
その横を抜けて、部屋の奥まで進み、畳の縁に沿って腰をおろした。
黒い服で埋まった部屋の中で、ガラスの向こうの緑だけが、やけに普通の色をしていた。
壁の木目をぼんやり眺める。ガラスの桟を数える。
どうでもいいことだけが、頭の中を静かに回り続ける。
さっきまで「死」のすぐそばにいたはずなのに、
ここでは、取り残された自分たちの時間のほうが、前に出てきてしまう。
奥の部屋から、足音が近づいてくる。係の人が、わたしたちを呼びに来た。
少しずつ、みんなが壁の切れ目の向こうへと消えていく。
見えないのに、たしかに「続き」がある。この建物には、そういう場所が多い。
わたしも遅れて、奥へと歩き出す。上下する天井。
連続して伸びる壁。光の明暗。それらが、胸の中の水面を、そっと揺らしていく。
部屋に入ると、お母さんが、二本の箸で骨をすくい上げるところだった。
お母さんが戻ってくる。お父さんが戻ってくる。自分の番になって、一片の骨をはさむ。
想像していたよりも軽い。でも、指先から胸の奥にかけて、ゆっくり重くなっていく。
つぼの中にそっとおさめると、かすかな音が鳴った。
その音といっしょに、「もう戻らない時間」と「これから続いていく時間」の境目が、
目には見えない、ごく細い線として、自分の中に引かれていく。
そして、もどる時に気づいた。棺とわたしたちのいたところだけが、照らされていた。
収骨室を出ると、廊下はそのまま堤防に沿って伸びていた。奥へと進んでいく。
天井が、少しずつ低くなっていく。堤防の壁から壁へ。
横から、一筋の光が差し込んでいた。そちらへ進んでいくと、おじいちゃんがいた。
「ちょっと、ここで休もか」おじいちゃんがそう言って腰をおろす。わたしも隣に座る。
「ここな」おじいちゃんが、窓の外を指す。「昔は、川のいちばん底やったんや」
「金勝川いうてな。山から土がようけ流れてきて、どんどん底が高なってしもて」
「ほやから、人は堤防ばっかり高うした。山の木切りすぎたつけが、この辺一帯の地形になっとるんや」
さっきまで、儀式の中にいた。なのにここでは、もっと長い時間の話が始まっている。
おじいちゃんは、少し間をおいて続けた。
「せやけどな、今は逆や」「ここで人がひとり死んだら、そのぶん、山に木が一本増える」
「骨、山に埋めて、木植えるやろ。あの木が、そのうち雨を抱えて、土を押さえて、
川をおとなしくしてくれる」
「死んだ人がな、この町を沈めんように、ちょっとずつ見張る側にまわるんや」
わたしは黙ったまま、川床の若い草と、遠くの山の稜線を、ゆっくり見比べた。
おばあちゃんの時間が終わった場所と、これからおばあちゃんの木が立つかもしれない場所が、
一本の見えない線で、静かにつながっている。おじいちゃんは少し前かがみになって、
窓の外の草をじっと見た。「からだの中でもな、おんなじことが起きとるんやで」ぽつりと言った。
「古なった細胞は、自分から場所あけて、静かに消えていく。ほいで、新しい細胞が育つ。
死ぬっちゅうのもな、ちょっと似とるんかもしれん。
ちいさな円の外に出て、もうちょっと大きい円のほうへ、場所ゆずりに行く」前に、
ひいおばあちゃんのことを聞いたとき、
「さあなあ」とだけ言ったおじいちゃんが、今回はゆっくりと言葉を選んでいる。
「ひいばあちゃん、覚えとるか。あの人の骨はもう山の土になって、その上の木が、
だいぶ太なっとるはずや。雨抱えて、根っこで土つかんで、この辺の川を、ちょっとは守っとる」
「人もな、よう似とる。普段喋ったことや、よう笑った顔が、
まわりの人間の中に、ちっちゃい種みたいに残るんや。
その種が、子どもに行って、友だちに行って、またその先の誰かにまで、じわじわ広がっていく」
「そうやって、人の中をぐるぐる回っとるぶんもまとめてな、
山や川や町ぜんぶのほうのでっかい円に、すっと混ざっていくんや」
おばあちゃんの骨の重さと、山のどこかで根をはる一本の木と、
自分の中に残っているおばあちゃんの口ぐせや笑い方を、そっと重ねてみた。
わたしも、たくさんの誰かから渡されてきた円の一部なんだろう。
おばあちゃんの時間も、その大きな円の中で、形を変えながら、続いていく。
火葬場を出て、わたしたちはそのまま山へ向かった。細い道を上がっていく。
斜面に、ひいおばあちゃんの木が立っている。
その少し先に、小さな穴を掘った。おばあちゃんの骨と苗木をそっとおさめて、土をかぶせた。
ひとすくい、またひとすくい。骨つぼの重さが、山のほうへ溶けていく。
風に揺れる二本の木を見上げる。
ひいおばあちゃんの木と、おばあちゃんの木。さっきおじいちゃんが言った言葉を思い出す。
「ちいさな円から、でっかい円へ」おばあちゃんの時間が、
家族だけじゃなく、この山と町のほうにも、静かに混ざっていく。
葬祭場の横のベンチに座っていた。目の前に、一本の木が立っている。
今日は葬式のない、静かな日だ。本をめくる。
「終わりを知ることで、受け継いだものを、自分で選び直せる」そんなことが書いてあった。
ひいおばあちゃんの木。おばあちゃんの木。山と、この川だった場所。
そして、ここに座っている自分。
みんな、同じ大きな円の中で、少しずつ形を変えて続いている。
そしてわたしは本をそっと閉じて、揺れる木の影を見つめた。